

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 追加付加詞と追加接合詞に関する一考察： 日本語とインドネシア語との比較

|       |  |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2017-03-31<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En): additive adjunct, additive conjunct,<br>Japanese and Indonesian<br>作成者: 正保, 勇, SHOHO, Isamu<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.15084/00001108">https://doi.org/10.15084/00001108</a>  |

## 追加付加詞と追加接合詞に関する一考察

—日本語とインドネシア語との比較—

正 保 勇

要旨：Sidney Greenbaum によれば、先行文脈に対して付加的な情報を追加したり、或は、先行文脈での言説を補強する役目を持つ一群の付加語 (adjuncts) を認めることができるという。そして、これには、追加付加詞と追加接合詞の二種類があるという。追加接合詞の代表的なものは、furthermore, moreover, equally, similarly であり、追加付加詞の代表的なものは、also, too, である。本論では、日本語とインドネシア語においてこの英語の追加付加詞と付加接合詞に相当する語句に関して、主として、次の観点から比較研究を行おうとするものである。イ) 追加付加詞・追加接合詞の占める文中での位置とそれによって焦点化される要素。ロ) 夫々の言語内における、追加付加詞相互間、或は、追加接合詞相互間の交換可能性。ハ) 追加付加詞により焦点化される要素と、新情報・旧情報の区別。

キーワード：追加付加詞，追加接合詞，も，又，同様に，日本語とインドネシア語

## A Study of Additive Adjuncts and Additive Conjunctions

—In the Cases of Japanese and Indonesian Languages—

Isamu Shoho

**Abstract:** According to Sidney Greenbaum (1970), there is a group of adjuncts in English whose function is to make an additional point or reinforce what has been said before. In this class of adjuncts are included additive conjunctions and additive adjuncts in his terminology, the difference between the two being that the former has a double function as adverb and conjunction, while the latter functions solely as an adverb.

Additive conjunctions occupy sentence initial position as usually do other conjunctions. On the other hand, additive adjuncts shift their position according to what part of the sentence the adjunct in question is to focus on in relation to the foregoing context.

This study compares Japanese and Indonesian words which are equivalent to the above mentioned English adjuncts to learn similarities and differences between the two languages mainly as regards the following points:

- 1) the correlation between the position occupied by the adjunct in question and the focused element which is associated with its adjunct
- 2) replaceability of one adjunct with another without ensuing meaning change in each language
- 3) the relationship between the focused element and distinction of new and given information

**Key words:** additive adjunct, additive conjunction, Japanese and Indonesian

## 1. はじめに

Sidney Greenbaum は、英語の副詞の中に追加付加詞と追加接合詞という分類の項目を立てている。この両グループの副詞は、共に、先行文脈に対して、新しい情報を付け加える機能を有しているが、追加接合詞は、前の文脈で述べられたことへの、情報の単なる追加補足にすぎないのに対して、追加付加詞の方は、追加される新情報が、先行文脈のどの部分と交換し得るものであるかを、それが置かれる位置、もしくは、音調の助けを借りてはっきりと示す機能を果たす。この追加付加詞による、文の一部のマーク付けの機能をここでは、焦点化と呼び、焦点化を受ける語句の範囲をスコープと呼ぶことにする。従って、追加接合詞は、文のある一部を焦点化することがないのに対して、追加付加詞は文中の一部を焦点化により、先行文脈のどの部分に対する追加情報であるのかを明確に示すという違いがある。

Greenbaum は、追加接合詞のグループに、again, also, then, furthermore, in addition, moreover, equally, likewise, similarly, by the same token, what is more, more than this 等を挙げ、追加付加詞として、agin, too, also, equally を挙げている。again, also, equally, too に関しては、両グループに跨がっている。両グループに跨がる語の一つである again を例にとりて両付加詞の違いを示してみる。次の最初の again は追加接合詞であり、二番目の again は追加付加詞である。

(1) Again, the psychologist can observe the child at work and at play.

(2) The psychologist, again, can observe the child at work and at play.

最初の文における again は、先行文脈に対して、新しい事柄を追加する役目しか果たしていないのに対して、二番目の文における again は、先行文脈で、心理学者以外で、子供が勉強したり遊んだりしているところを観察することができる人についての言及があったことを窺わせる。そして、「子供

が勉強したり遊んだりしているところを観察できる人」のリストの中に、心理学者も付け加えられることを示している。日本語を例にとると、「又」という語も、追加接合詞としての用法と、追加付加詞としての用法の両方がある。次の最初の例に現われる「又」は、追加接合詞としての用法であり、二番目の例に現われる「又」は、追加付加詞としてのそれである。

(3) 又、「泣くから悲しい」という理論にも、それを裏付ける事実があることは確かである。

(4) 妹の方も又美しい。

一方、インドネシア語においても、*juga* という語には、上記の二用法が認められる。最初の例に現われる *juga* は、追加接合詞として用いられたものであり、二番目の例に現われた *juga* は、追加付加詞として用いられたものである。

(5) *Dia juga sakit malaria.*

(彼も又マラリヤに罹っている。)

(5) *Juga pilihan makan semakin terbatas dengan hilangnya fungsi gigi karena ompong.* (Intisari No. 258, p. 49)

(さらに又、歯が抜けて歯の機能が失われているために、食べる食べ物も次第に制限されることになる。)

以上見てきたように、追加接合詞は、英語、日本語、インドネシア語の三言語を通じて、文頭に置かれるのに対して、追加付加詞の場合は、それが文中のどの語を焦点化のスコープとして取るかによって種々の位置を占めることが多い。例えば、追加付加詞の一つである *also* は、通常その直前の語を焦点化のスコープとするので、次の二つの文は、訳文が示すように誤用論的には同義ではない。

(6) *The children also went swimming.*

(子供たちも又泳ぎに行った。)

(7) *The children went swimming also.*

(子供たちは水泳にも出かけた。)

又、上記の訳文が示すように、日本語の追加付加詞である「も」も、文中のどの位置を占めているかによって、その焦点化のスコープを知ることができる。しかし乍ら、上の場合とは逆に、追加付加詞の位置のみからは、焦点化のスコープを知ることができない場合もある。例えば、次の例では、追加付加詞の *also* が主語と動詞の後に置かれているが、音調上の差違を捨象して考えれば、下の訳文が示すように三通りに解釈し得る。

(8) I also bought a book.

イ) 私もまた本を買った。

ロ) 私は本を（借りもしたが）買いもした。

ハ) 私は本も買った。

同様のことは、日本語の「も」についても言える。上の例の三つの訳文においては、「も」が取るスコープの違いに応じて、その占める位置も異なっているため、「も」の位置だけ見ても、文中のどの語句がスコープとなっているかが分かる。しかし乍ら、日本語の「も」は、主語の直後に置かれた時には、上記（イ）の解釈の外に、（ロ）と（ハ）の解釈も許す。つまり、「も」は、それがスコープとする語に隣接した位置から移動することも可能であるという特徴を有している。

本論では、英語の追加接合詞と追加付加詞と同様の機能を有するインドネシア語の三つの語 (*juga*, *pun*, *pula*) を、日本語の追加接合詞、追加付加詞と比較し、その異同について調べてみる。尚、その際、前述したように、追加付加詞については、その文中で占める位置とスコープとの関係が重要であるので、その点についての考察に特に重点を置くつもりである。

## 2. *juga*

### 2.1. 主語をスコープとする *juga*

*juga* は、次の例にみられるように、そのスコープとなっている主語が、述語によって述べられていることが当てはまるグループの中に追加されることを表わす用法がある。

(9) Orange County merupakan tempat kediaman orang-orang kaya dan bank itu juga kaya. (Intisari, No. 262, P. 67)

(オレンジ郡は、裕福な人々の居住地であり、その銀行も又、繁盛していた。)

この文の前半では、オレンジ郡に住んでいる人達が裕福であることが述べられている。後半に現われる juga は、この前半での記述を踏まえて、オレンジ郡の人達は裕福であるが、その銀行も又、同様に裕福、つまり繁盛していたということを表わしている。つまり、ここでは、述語の記述は、旧情報であり、固定されているのに対して、juga のスコープの中に入る主語が、述語の記述が妥当するグループの中に追加されるものとして新たに導入される新情報を成している。この使い方の juga は、次の文における「も」の使い方と等しいものであり、日本語でもこの場合、主語の後にこの併説の助詞を置く。

(10) 太郎は三郎を殴った。次郎も三郎を殴った。

このケースでは、述語が旧情報であるため、この旧情報の部分が代用形で置き換えられたり、或は、省略が行われたりすることが屢々起こる。次の (11) は、代用形と juga が一緒に現われている例である。

(11) Para pendeta yang bersenjata dilucutinya. Begitu juga para petani. (Mengenal Jepang, p. 13)

(武装した僧侶達は皆、彼により、武装を解かれた。全ての農民達も又然りであった。)

インドネシア語では、旧情報が文頭の位置を占めることが圧倒的に多いので、この例にみられるように、代用形が主語の前に出る形が多くみられる。この場合、もし、通常の語順であれば、述部は、倒置された場合とは異なり、'juga begitu' という形をとる。

又、次の例では、juga が省略文と共に現われている。

(12) Ninung ke ruang makan. Linda juga.

(Komplotan Daun Emas, p. 72)

(ニヌンは食堂へ行った。リンダも又そうした。)  
もし、この文で省略された部分を代用形で置き換えれば、次のようになる。

(13) ... Linda juga begitu.

又、この文を倒置させて、(14)のように言うことはできるが、*juga* のみを主語の前に出した(15)は、この文脈では不適当な形である。

(14) Begitu juga Linda.

(15)※... Juga Linda.

## 2.2. 述部或は述部の一部をスコープとする *juga*

前節で扱った *juga* は、新情報である主語をその焦点化のスコープとするものであったが、*iuga* には又、新情報である述部全体をそのスコープとする用法がある。そしてこの場合には、*juga* は、旧情報である主語、若しくは主題と述部の先頭との間に置かれる。尚、この場合の主語には、副詞句が主題化されて文頭に出たものも含まれる。次の(17)は、旧情報の主題が名詞の場合であり、(18)は旧情報の主題が副詞句の場合である。

(16) Ia pemain piano yang mahir. Ia juga bisa memainkan instrumen lainnya, termasuk klarinet. (Intisari No. 277, p. 101)

(彼はピアノの巧みな奏者であった。彼は又クラリネットを含めて、他の楽器も演奏することができた。)

(17) Di sana ada orang-orang yang kaya dengan isteri mudanya yang ketiga atau keempat. Di sana juga ada sepasang suami-isteri yang berumur kira-kira setengah abad dari Inggris.

(Misteri Karibia, p. 26)

(そこには、三、四人の妾を囲っている金持の連中が居た。そこには又、イギリスから来た五十歳位の一組みの夫婦も居た。)

このような場合、日本語では、「…は又…もした」という表現になることが多い。しかし、この日本語の表現は、先程の二例のように、述部全体をその焦点化のスコープとする時に使用する外、述部の一部をそのスコープとする時にも使われる。例えば、次の「も」を使った日本語の文は、下に示したよ

うに二通りの解釈が成り立つ。

(18) 彼は庭も掃除した。

イ) 彼は(他の場所も掃除したがそれ以外に)庭も掃除した。

ロ) 彼は(他の仕事もしたがそれ以外に)庭を掃除することもした。

次に, juga が述部の一部を焦点化のスコープとする場合について見てみる。 juga が述部の一部をその焦点化のスコープとする場合には, juga は焦点化を受ける語句の前に置かれる。次の例では, juga が目的語の前に来て, その目的語を焦点化している。

(19) Roket pneumatis di bawah tanah untuk memasang pipa kini bisa menghemat biaya penggalian dan kemudian juga biaya untuk memperbaiki jalan lagi.

(パイプ敷設用に地下で使われる圧搾空気式ロケットは, 掘削の費用を軽減できるばかりでなく, (一度掘り返した) 道路の修復工事に掛っていた費用をも軽減できる。)

次の例では, juga がその後続く副詞句をその焦点化のスコープとしている。

(20) Sebagai kepala rombongan, dan juga sebagai ketua kampung, Pak Tirta memberikan ijin... (Darah Nelayan, p. 18)

(集団の長として, 又村の長として, ティルタさんは許可を与えた…。)

インドネシア語では, juga が述部の一部を焦点化のスコープとする際には, これまで見てきたように, 通常, そのスコープとなる語句の前に juga が置かれたが, 次の例が示すように, 述部の冒頭に置くこともできる。この場合には, juga が述部全体をその焦点化のスコープとしているか, 或は, その一部を焦点化のスコープとしているかは, 先行文脈によって決定しなければならない。

(21) Selain bunga kelapa, Tan juga mau membeli jantung pisang

yang belum mekar.

(Kubah, p. 106)

(椰子の花の外に、タンは、未だ開いていないバナナの花も買ったかっ。

又、次の(22)では、*juga* がその焦点化のスコップとしているのは、述部全体(つまり、*pergi*)であると考えられるので、*juga* は、その焦点化のスコップとする語句の後ろにも置かれるようにみえるが、この場合の *juga* には、(23)の文に現われる *juga* にはない「仕方なく」の意味が籠っているので、別の用法と考えるべきであろう。

(22) Karena kakaknya pergi, si Amat pergi juga.

(兄/姉が行ったので、アマットも又行った。)

(23) Karena kakaknya pergi, si Amat juga pergi.

日本語の「も」は、述部の一部をその焦点のスコップとする場合には、インドネシア語の場合とは逆に、当該語句の後に置かれる。又、日本語の「も」は、焦点化のスコップの決定に関与する部分、つまり、焦点化を受ける部分に先行し、これと対を成す部分にも、この併説の助詞を付加することも可能である。前出の(16)の訳文を例にとると、この訳文は、次のように、二回「も」を使うことも可能である。

(24) … 掘削の費用も軽減できるばかりでなく、道路の修復工事に掛っていた費用も軽減できる。

この例にみられるように、焦点化される部分が目的語の場合には、焦点化を引き起こす要素と共に「も」を取ることが可能である。しかし乍ら、このような操作は無条件に行うことはできないようである。例えば、前出の(20)の訳文に、同様の操作を施した文(22)は、認められない形である。

(22)※集団の長としても、又村の長としても、ティルタさんは許可を与えた。

これに対して、同じく「も」が二回出てくる次のような文は非文とはならない。

(23) 彼は、男としても、又大企業の社長としても、そのような屈辱的

な条件をのむ訳けにはいかなかった。

しかし乍ら、この文の最後の部分を「…のまなかった。」とすれば、(22)の文と同様、認められない形となる。これは、「…としても」が二度現われる場合には、具体的な実際の事実の記述とはならず、認容的な意味がそこに入り込んでくるために、具体的な事実の記述というコンテクストの中で使用すると、齟齬をきたすからであろうと思われる。例えば、(23)の前半の部分は、ほぼ、「男としての彼を想定するにしても、社長としての彼を想定するにしても」の意に相当する認容的な含みを持っていると言える。次の文が認められないのも、「も」が付加された二つの副詞句の連結が先の例と同様に、認容的な意味あいが増してくるためであろうと思われる。

(24)※彼は自分が公正な人間であることを示すためにも、生殺与奪の権限が自分にあることを示すためにも、その家臣を斬った。

つまり、この文の二つの副詞句が連結した部分は、ほぼ「公正な人間であることを示すにしろ、生殺与奪の権限が自分にあることを示すにしろ」の意味に等しい。従って、仮定の世界に属する認容文が、現実の出来事を述べた文と共に用いられていることが、この文の非許容性に繋がっていると思われる。同様の理由によって、次の文が排除されることになる。

(25)※そのホテルでは、ドルでも、円でも支払いをした。

一方、「ドルでも、円でも」の副詞句の連結を、次のように、具体的な既成の事実を表わしているのではない文脈の中に組み込むと、文法的な文となる。

(26) 当ホテルでは、ドルでも円でも宿泊費の支払いが可能です。

### 2.3. 追加接合詞としての juga

これまで述べてきた juga の用法は全て、その前の文脈の一部が土台となって、文中の一部が焦点化されるという点で共通していた。しかし、juga には、これとは別に、「それに加えて」、「また」、「おまけに」等の意味で、単に前の文脈への追加という機能のみを果たす使い方がある。これまでの juga が、その前の文脈との対比によって、焦点化され前面に出てくる部分と、逆に背景に後退していく部分に二分される状況で使用されたのに対して、追加

接合詞としての juga は、ある部分を焦点化するのではなく、前の文に対する単なる追加や敷衍を行う際に用いられる。次の例にみられるように、追加接合詞としての juga は、文頭もしくは文尾に置かれる。

(27) Juga pilihan makan semakin terbatas dengan hilangnya fungsi gigi karena ompong. (Intisari No. 258, p. 49)

(それに又、歯が抜けて歯の機能が低下するに伴って、食べる物も制限されてくる。)

(28) Perawat-perawat juga. (Ketika Cinta Harus Memilih, p. 10)  
(それに又、看護婦なのでから。)

文がそれ程長くなく、文尾に置いても誤解を生じないような場合には、文頭の juga を文尾に移すことが可能である。例えば、次の (29) は、juga を文尾に移して (30) とすることができる。

(29) Kia-kira pukul tujuh, sang dalang beserta pemain-pemain gamelan mengambil tempatnya masing-masing. Dekat gong disediakan sajian. Juga kemenyan dibakar.<sup>注1)</sup>

(A Modern Reader in Bahasa Indonesia, p. 90)

(七時頃、人形使いが、ガメランの奏者と共に夫々の座に着く。銅鑼の近くに供え物が用意されている。又、香も焚かれている。)

(30) ... Kemenyan dibakar iuga.

しかし乍ら、(26) のように長い文においては、次のように juga を文尾に置くことはできない。

(31)※Pilihan makan semakin terbatas dengan hilangnya fungsi gigi karena ompong juga.

これは、次章で述べる pula と交替可能な jugs との混同が生じるからであろう。つまり、pula には、次のように、その前の文脈で一度出てきた語句を、「同様に」、「又」の意味で焦点化する用法がある。

(32) Sesudah kain dicelupkan ke dalam warna pertama, dan warna

itu sudah sungguh-sungguh diserap oleh kain itu maka perlulah kain tersebut dikeringkan sungguh-sungguh pula.

(A Modern Reader in Bahasa Indonesia, p. 70)

(布を最初の染料の中に浸し、その布によく染料がしみ込んだら、その布を、同様によく乾かす必要がある。)

この文において、pula がそのスコープとしているのは、その直前にある語句の 'sungguh-sungguh' であり、その前の文脈に一度現われた同じ語句によっても表わされる事態が繰り返されている点に重点を置き、「(先の場合と同様に)」、或は「(今度も) 又」の意味で、スコープ内の語に掛っている。そして、この用法の pula は、juga と交替可能であり、繰り返し現われた旧情報の語句の後に置かれ、その語句を焦点化のスコープとする。それ故、(31) の例において現われている juga がこの pula の用法と同じ用法と考えられる余地がある。つまり、'ompong' もしくは 'karena ompong' という語句が、先行する文脈でも現われ、それとの関係において、「先程の場合と同様、これも又歯が抜けていること (によって)」、もしくは「先程の場合と同様、これも又歯が抜けているという理由によって」というような意味で、juga が使用されていると考える解釈を許すことになる。従って、この二通りの解釈を許す位置で juga を使用するのを避けようとするのは、他の用法の juga と混同される虞れのない文頭の位置があることと考慮併せると、極めて当然のことであると言える。

### 3. pula

#### 3.1. 述部の一部をスコープとする pula

前章で扱った juga は、次の例に見られるように、述部の全体をその焦点化のスコープとすることもできるし、述部の一部をスコープとすることもできた。

(33) Selain itu, meningkatnya penduduk golongan usia lanjut juga membawa dampak sosial bagi keluarga...

Intisari No. 258, p. 51)

(その外にも、老年層の増加は又、家族の者にも社会的なインパクトを与えている。)

- (34) Lama-kelamaan baru saya tahu bahwa kepala keluarga yang pulang paling dulu, selain memasukkan embarnya juga ember tetangganya. (Intisari No. 158, P. 98)

(終に、やっと私は、一番最初に帰って来た一家の主が、自分のバケツの外に、隣人のバケツも中に入れるのだということが判った。)

pula も、これらの juga の用法と同様に、述部全体の外に、その一部もその焦点化のスコープとすることができる。次の例がそのことを示している。

- (35) Dia bertubuh kecil, berkulit gelap dan rambutnya hitam. Matanya pun hitam pula. (Si Bongkok dari Notre-Dame, p. 4)

(彼は小柄で、色が黒く、目も又黒かった。)

- (36) Tetapi sebagai jawaban, Daendels memerintahkan supaya Sultan menyerahkan Patih Wargadireja kepada Daendels yang ia pandang sebagai perlawanan. Ia memerintahkan pula supaya tiap hari dikirim 1000 pekerja...

(Sejarah Kebangsaan Jilid 2, p. 37)

(しかし乍ら、回答として、ダエンデルスは、王がワルガディルジャを自分の敵であるダエンデルスに引き渡すよう命令を下した。彼は又、毎日千人を夫役の為に差し出すようにも命令した。)

両者共、述部もしくはその一部を焦点化のスコープとしてとることができるという点では一致しているものの、両者の間には、情報構造的にみて、大きな違いが認められる。即ち、juga は、新情報をその焦点化のスコープとするのに対して、pula の方は、その前の文脈で現われた旧情報をその焦点化のスコープとしている点に違いがある。言い換えれば、juga が了解されて

いる前提に新たに追加される要素に焦点を当てるのに対して、pulaの方は、同様の事態の反復生起そのものに焦点を当てていると言える。以上のような機能の故に、pulaは、述部の一部と関連を有する場合には、旧情報と新情報の分かれ目に相当する部分に挿入されることになる。つまり、pulaは、それがスコープとする語句の後ろに置かれ、pulaの左に来るスコープとpulaとの間に新情報が介在するのを許さないという制約がある。このことは、例文の(36)によっても明らかである。つまり、この文においては、最初の文で、ダエンデルスがある事を命令したという記述があるので、第二の文における‘memerintahkannya’という語句は、旧情報となり、従って、pulaの焦点化のスコープに入り得る。しかし乍ら、それに続く‘supaya...’の部分は、新情報であるので、pulaはこの新情報より右の位置に動くことができないわけである。同様に、次の例においても、二番目の文に出てくるpulaはその前の文に現われた‘sendiri’をその焦点化のスコープとしているが、その後続く‘ke sel isolasi’の部分は、新情報なので、pulaは、この新情報の語句の前で止まることになる。

(37) Faisal mengisi sendiri jarum suntiknya dengan obat penenang.  
(Ketikanya) Dan membawanya sendiri pula ke sel isolasi.

(Faisalは一人で注射器に鎮静剤を注入した。そして、今度も一人で隔離病室へと運んで行った。)

(フェイスサルは一人で注射器に鎮静剤を注入した。そして、今度も一人で隔離病室へと運んで行った。)

pulaがjugaと異なるもう一つの点は、jugaが述部の前に置かれるのに対して、pulaは、次のように述部の先頭に置くことができない。

(38)※Dia pula pergi ke kantor.

(彼は又事務所へ行った。)

pulaとjugaのもう一つの相違点は、jugaが、主語をその焦点化のスコープとすることができたのに対して、pulaにはそのような用法がない。つまり、pulaは述部の焦点化専用の語であると言える。このことから又、主語の焦点化専用のpunと共起することが可能になる。次例がこの事を示して

いる。

(39) Amin pemain piano yang mahir. Dia pun bisa memainkan pula gitar.

(アミンはピアノの巧みな奏者である。彼は又、ギターも弾く。)

これに対して、pula は、主語をスコープとする juga と共に現われることはない。例えば先程の (39) で、後半の部分を次のように変えることはできない。

(40)※Dia juga bisa memainkan pula gitar.

pula が、先に述べたように、旧情報と新情報の間に割り込む形で挿入されるので、pula のが収まっている位置は、その文の解釈上重要な意味を持つ。例えば、次の文で、 $\Delta_1$  の所に pula が入っている場合と、 $\Delta_2$  の位置に pula が入っている場合とでは、誤用論的意味を異にするとと言える。即ち、前者の場合には、‘samar-samar’ のみが旧情報の扱いを受け、‘terdengar’ の部分は新情報とみなされるので、前の文脈では、例えば ‘samar-samar terlihat…’ (微かに…が見えた) というような聴覚によって捉えられる事象とは関係ない記述が来ても差し支えない。つまり、この際に重要なのは、‘samar-samar’ という記述が前の文にもあるということだけが、pula の使用を許す条件であるということである。これに対して、後者の場合には、‘terdengar’ の部分も旧情報となるので、その前の文脈においても又、何かが微かに聞こえたという記述がなくてはならない。

(41) Samar-samar $\Delta_1$  terdengar $\Delta_2$  irama bonang, gong dan kecrek yang ditabuh serasi.

(調子を合わせて打ち鳴らすボナン、銅鑼、ケチュレックの響きが微かに聞こえた。)

つまり、後者の場合には、倒置して前に出た適部全体が pula のスコープになっているのに対して、前者の場合には、pula のスコープが述部の一部である ‘samar-samar’ だけになっているということである。

pula には又、「今度も又」、「(先程と) 同様に」の意味から分化した「もう一度」という意味もある。pula がこの意味で使用されるのは、一度中断した

動作を再度続けたり、一度終了した動作をもう一度繰り返すような場合が多い。又、この用法においては、これまでの用法とは異なり、繰り返される動作が如何なるものかについての言及が先行文脈で明示的になされている必要はなく、先行文脈から推測できれば足りる。次がその例である。

(42) Kemudian kami meneruskan perjalanan pula. (Dia, p. 52)

(その後で、私達は又旅を続けた。)

(43) Setelah berhimpunlah mereka itu semuanya sultan itu pun menyuruh orang memanggil Abu Nawas pula.<sup>注2)</sup>

(Abu Nawas, p. 50)

(彼等全員が揃った後で、王は、もう一度、アブナワスを呼ぶようにと命令した。)

ここで取り扱った *pula* の用法は、日本語では、「同様に」、「又」等の語句で訳されるのが普通であるが、「又」の使い方に関しては、インドネシア語の場合とは異なる、スコープ決定上の規則があるように思われる。ここでは便宜上、簡単な文を使ってその用法上の制約を眺めてみることにする。先ず、「又」が係助詞の「は」と共に現われる種々の場合を考えてみる。次に、その幾つかの例を掲げることにする。

(44) 又、太郎は、宝石を花子にあげた。

(45) 太郎は又、宝石を花子にあげた。

(46) 太郎は、又宝石を花子にあげた。

(47) 太郎は、宝石を又、花子にあげた。

(48) 太郎は、宝石を、又花子にあげた。

(49) 太郎は、宝石を、花子に又、あげた。

これら全ての文は、「又」の位置を異にするにも拘らず、語用論的意味を等しくする。つまり、この文の裏にある前提は、これらの文の発話の時点以前に、「太郎が宝石を花子にあげた」という事実が存在したということであり、これらの文における「又」の役割は、同様の事実が反復生起したことを表わすことにある。つまり、係助詞の「は」と一緒に「又」が使用される時には、

「又」は、文中の一部のみを取り出して、その反復生起を表わすのではなく、その位置に関係なく、それが現われる文全体の反復生起を表わすことになる。以上のような事情があるので、次のようなインドネシア語を訳す時に、単純に、インドネシア語の *pula* が関係する語句に「又」をつけるわけにはいかない。つまり、この文の後半を、「そして、(ファイサルは)それを又一人で隔離病室へ運んでいった。」と訳せば、それ以前にも、まったくこれと同様の事態が生起したという前提を有する文となる。従って、訳文は、「今度も又一人で隔離病室へ運んでいった。」とでもしなければならぬ。

次に、併説の助詞「も」と共に「又」が現われる場合をみってみる。「は」と「又」が一緒に現われた場合とは異なり、今度は、「又」が文頭に置かれた次のような文は許容度の低い文となる。

(50) ※又、次郎も宝石を花子にあげた。

「又」を「又しても」と変えれば、この文の非文法性がよりはっきりする。

(51) ※又しても、次郎も宝石を花子にあげた。

これは、「又」がその文で述べられている事態がそっくりそのまま、以前にも生起したことを表わす機能があるのに対して、「も」は、その文中の一部のみが、それ以前に生じたでき事とは異なるものとして、それを新たに追加するという機能を有している。従って、両機能は互いに相容れないものであり、同一の文中に、その機能において相容れない二つの語句が存在するのは、当然その文の解釈上の困難をもたらす。上の例とは異なり、「も又」を主語の後に付加した次の文は、「又」が付加されていない文と意味の上では相違ないし、同様の事態の反復生起を表わすこともない。

(52) 次郎又宝石を花子にあげた。

しかし乍ら、「も」と一緒に「又」を使用した次のような文においては、前の「は」と一緒に「又」が現われる場合とは異なり、「又」が表われる位置によって語用論的意味を異にする。

(53) 次郎も、又宝石を、花子にあげた。

(54) 次郎も、宝石を、又花子に、あげた。

最初の例においては、「又」が付加されている語句は、その前の文脈においても現われている必要がある、つまり旧情報でなければならないが、それ以外の部分は新情報であっても構わない。

即ち、最初の文の裏にある前提は、「(次郎以外の) ある人が花子或は花子以外のある人に宝石をあげた」ということであり、宝石を贈られた人が必ずしも花子である必要はない。同様に、二番目の文においては、「又」が関連する「花子」は旧情報に属するが、「宝石」は新情報であっても構わない。更に、両文における「又」の位置を変えて次のようにしても、その語用論的意味では、変更を加える前の文と、その語用論的意味に変化は生じない。

(55) 次郎も、宝石を又、花子にあげた。

(56) 次郎も、宝石を、花子に又、あげた。

以上のように、「も」は、「は」の場合と異なり、「又」が関連する語句のみを焦点化のスコープとする解釈が可能であるのは、「も」には、本来、述部全体が旧情報の場合でも、述部の一部が旧情報の場合でも使用できるという特徴があるという事情のためであろうと思われる。このことは、次の二対の例によって知ることができる。

(57) 太郎は自転車でその現場へ駆けつけた。

次郎も自動車でその現場へ駆けつけた。

(58) 太郎は犬をステッキで叩いた。

次郎も猫をステッキで叩いた。

最初の例では、後半の文の述語全体が旧情報となっている。これに対して、二番目の例では、後半の文の述語の一部である「ステッキで殴った」の部分のみが旧情報であり、この場合には、次のように、「又」を旧情報の部分に付加することが可能である。

(59) 次郎も、猫を、又ステッキで叩いた。

次郎も、猫を、ステッキで又、叩いた。

以上のことから、「も」と一緒に使用される「又」は、「は」と「又」の場合とは異なり、必ずしも述部全体の反復生起を表わすのではなく、述部の一部

のみが旧情報でありさえすれば使用できるということである。従って、次の例のように、文の前半と後半で主語が別の人物である場合には、日本語で訳す際に、‘ruang makan’（食堂）を焦点化のスコープとする「又」を用いて訳すことができる。

- (60) Dari kamar itu sekarang keluar Halimah membawa penjahitannya dan pergi duduk di ruang makan itu, sedangkan Wati adiknya sedang asyik membaca sebuah majalah di ruang makan itu pula. (Hati Nurani Manusia, p. 18)<sup>注3)</sup>

（その部屋から、今度はハリマが縫い物を持って出て来た、そして食堂に行くとそこに座った。一方弟のワティも、その食堂で又、一冊の雑誌を熱心に読んでいた。）

「又」は、次のように、併説の助詞「も」の直後に置かれることがあるが、この場合は、単なる強調の機能を果たすだけであり、語用論的には、「も」だけが現われる文と変わりがない。

- (61) 太郎も又、花子に、宝石をあげた。

同じ事が、次のように、「又」が、併説の助詞の「も」を伴った主語以外の語に付加される場合についても言える。つまり、この文は、「又」の無い文と語用論的意味において相違を示すことはない。

- (62) 次郎は、花子に、指輪も又、あげた。

pula には又、代用形と共に現われる次のような使い方がある。

- (63) Mulut Georges terbuka lebar—begitu pula mulutku.

(Tenggelam dalam Pusaran Maelstrom, p. 54)

（ジョルジュは口をぽかんと開けた、私もそうであった。）

pula は、前にも述べたように、述部もしくは述部の一部しかスコープとして取らないので、勿論、この ‘begitu pula’ は、その前の文脈との関連で、‘terbuka lebar’（ぽかんと開いた）という語句の代用をしているということとは明らかである。そして、この pula は又、juga と、意味の変化を生じることなしに、交換することが可能である。但し、juga の場合には、述部代用句が

正位置つまり主語の後にある時には、*juga* がその代用句の前に来て、‘*juga demikian*’, 或は、‘*juga begitu*’ という形をとったのに対して、*pula* の方は、倒置文であろうが、通常の語順であろうが、常に代用語句の後に置かれる。このことは、*pula* が、そのスコープとする語句の後ろに置かれ、その前に置かれることがないという事を考えれば、当然のことである。

### 3.2. 付加接合詞としての *pula*

*pula* には、前節で扱った用法とは異なって、先行文脈にその語が現われたかどうかとは関係なく使用される別の用法がある。例えば、次の例がここで取り扱おうとしている用法の *pula* を使用した例である。

(64) *Dia tidak terlalu cantik. Pendek. Gemuk. Pakai kaca mata pula.*  
(Ketika Cinta Harus Memilih, p. 19)

(彼女はほどび抜けて綺麗であるという訳ではない。チビだし。太っているし。おまけに、眼鏡を掛けているときてる。)

(65) *Mengapa justru mesti pada Dytia, bintang filem yang anak orang sakit jiwa pula?* (Ketika Cinta Harns Memilih, p. 72)

(どうして、ディティア以外の女の子ではいけないのだ。それに、精神病の父を親に持つ女優だというのに。)

この例から分かるように、この *pula* 用法は、単に先行する文脈の記述に対する追加の機能を果たしているだけであり、それがスコープとして取る語句が旧情報かどうかとは関係がない。日本語の訳では、「その上」、「それに」、「おまけに」、「それに又」等の追加の機能を持つ接続詞、或は接続詞相当句となって現われる。*juga* にも、この用法の *pula* と同様の用法があるが、*pula* は、*juga* とは異なり、文尾にしか置かれないという特徴がある。

## 4. *pun*

### 4.1. 主語をスコープとする *pun*

この用法の *pun* は、述部で述べられている事態と同様の事態が当てはまるものが、先行文脈に現われたもの以外にあるということを表わし、それを

新たに追加するという機能を有している。この点において、この用法の pun は、第二章の第一節で述べた juga の用法と重なり合うものである。

(66) Seperti di Los Angeles, di Atlanta pun FBI menemui jalan buntu.

(Intisari No. 278, p. 78)

(ロサンゼルスでもそうであったが、アトランタでも又、FBI は、捜査に行き詰まってしまった。)

(67) Seperti Udin ia pun tertawa terus...

(Hati Nurani Manusia, p. 10)

(ウディンと同様に、彼も笑いが止まらなかった…。)

両文共、‘seperti’ (…の様に) の句が先行文脈としての役割を果たし、seperti 句の中に出てくるものが、述部で述べられている事態が当てはまる候補群の一つであり、この候補群へ追加がなされる語句に pun が付加されている。つまり、最初の例では、主題化された場所の副詞句が pun の焦点化のスコープであり、二番目の例では、主語が焦点化のスコープとなっている。

pun には、次節で述べるように、述部全体を焦点化のスコープとする用法があるが、この用法の場合でも、pun は述部の先頭には立つが、述部の内部に現われることはない。従って、先程の (66) において主題化されて文頭に出ている副詞句を、述部の内部に戻すと、次の例が示すように、もはや pun を付けることができなくなる。

(68)※Seperti di Los Angeles, FBI menemui jalan buntu di Atlanta pun.

このように、pun は述部の内部に入り込むことがないので、これと丁度相補的關係に立ち、述部の外に出ることがない pula と一緒に用いられても、支障をきたすことがない。そのため、次のような形の文も可能となる。

(69) = (35) Dia bertubuh kecil, berkulit gelap dan rambutnya hitam.

Matanya pun hitam pula.

(彼は、小柄で、色が黒く、髪も黒かった。眼も又同様に黒かった)

(70) Jika kakak pergi, saya pun hendak pergi pula.

(もし姉さんが行くなら、私も又行きたい。)

この用法の pun は、これまでの例から判るように、通常、主語の後に置かれるが、主語の前に置かれる場合もある。次の2例は、pun がそのスコープとする語の前に置かれた例である。

(71) Pun perkara pencurian berkurang juga di bulan ini.

(Bahasa Indonesia, p. 768)

(今月は窃盗の件数も又減っている。)

(72) Dan semma orang menjadi tertawa mendengar kata-kata Solihin itu, pun Pian sendiri menjadi tertawa.

(Hati Nurani Manusia, p. 16)

(そして全ての者が、ソリヒンの言葉を聞いて笑い出した。ピアンも又笑い出した。)

#### 4.2. 述部をスコープとする pun

pun には、juga と同様、述語をその焦点化のスコープとする用法がある。しかし乍ら、juga の場合とは異なり、述部の一部をそのスコープとすることはできない。しかも、pun のスコープとなる述部の中に目的語がある場合には、その直前に pula が置かれるのが普通である。次の例を参照されたい。

(73) Ia pemain piano yang mahir. Ia pun bisa memainkan pula gitar.

(彼は巧みなピアノの奏者である。彼は又、ギターも弾くことができる。)

(74) Selain itu, meningkatnya penduduk golongan usia lanjut pun membawa pula dampak sosial bagi keluarga.

(それ以外に、老年層の増加は、家族の者に社会的なインパクトも与えている。)<sup>注4)</sup>

## 5. juga, pula, pun の互換性

### 5.1. juga と pun

主語を焦点化のスコープとすることができる juga と pun は、次に見られるように相互に交換が可能である。

(75) Seperti Udin ia  $\left\{ \begin{array}{l} \text{juga} \\ \text{pun} \end{array} \right\}$  tertawa terus...

(Hati Nurani Manusia, p. 10)

juga と pun には又、述部全体を焦点化のスコープとする用法があるが、この場合には、無条件で交換することはできない。即ち、pun を使用する場合には、述部の旧情報の後に付加される pula が同時に表われるのが普通である。そして、pun と共に用いられる pula は、形容詞や自動詞の場合には、その最後に置かれるが、他動詞の場合には、動詞と目的語の間に入るのが普通である。つまり、次の (76) と (77) を、pun を使って書き直すと、夫々、(78) と (79) のようになる。

(76) Selain itu, meningkatnya penduduk golongan usia lanjut juga membawa dampak sosial bagi keluarga...<sup>注5)</sup>

(77) Seperti Udin ia juga tertawa.

(ウディンと同様に、彼も又笑った。)

(78) Selain itu, meningkatnya penduduk golongan usia lanjut pun membawa pula dampak sosial bagi keluarga...

(79) Seperti Udin ia pun tertawa pula.

### 5.2. juga と pula

述部の旧情報の部分が代用形になっていて、しかも、それが倒置して主語の前に出ている場合には、その代用形の後に、juga も pula も現われる。次の例を参照されたい。

(80) Mulut Georges terbuka lebar-lebar—begitu  $\left\{ \begin{array}{l} \text{juga} \\ \text{pula} \end{array} \right\}$  mulutku.

(Tenggelam dalam Pusaran Maelstrom, P. 54)<sup>注6)</sup>

しかし乍ら、主語を焦点化のスコープとする juga や pun と共に代用形が使用される場合には、その代用形に付加される juga, pula には使用上の制限がある。即ち、主語に pun が付加されている時には、次の例に見られるように、述部の代用形には、juga も pula も付加することができる。

(81) Mulut Georges terbuka lebar—mulutku pun begitu  $\left\{ \begin{array}{l} \text{juga} \\ \text{pula} \end{array} \right\}$ .

これに対して、主語に juga が付加されている時には、次のように、pula を付加することはできない。

(82)※Mulut Georges terbuka lebar—mulutku juga begitu pula.

そして、この場合には、代用形のみが現われるのが正しい形である。

juga と pula には、述部全体が旧情報の時に、その述部の後に置かれ、「又」、「同様に」の意味で使われる用法がある。つまり、この用法においては、両者を相互に交換することが可能である。このことを実例で示すと次のようになる。

(83) Bila kecil dimanjakan, sudah besar pun akan menjadi manja

$\left\{ \begin{array}{l} \text{juga} \\ \text{pula} \end{array} \right\}$ .

(Kamus Umum, P. 100)

(小さい時に甘やかされると、大きくなっても又、甘えていることになる。)

(84) Secepat marahnya, secepat itu  $\left\{ \begin{array}{l} \text{juga} \\ \text{pula} \end{array} \right\}$  Solihin baik kembali...

(Hati Nurani Manusia, p. 16)

(怒るのも早い、それと同様に、すぐ又ソリヒンは気嫌を直して...。)

しかし乍ら、以上のように相互に交換が可能な場合とは別に、同一の人又は物についての記述かどうかによって一方しか使用できない場合もある。即ち追加付加詞が現われる文と、追加付加詞が関連を有する文とが同一の人又は物についての記述である場合には、juga は使用できるが、pula は使用できない。これとは逆に、問題となる両文が、異なる人又は物についての記述である場合には、juga も pula も使用できる。

このことを実例に即して説明してみる。次の文は、追加付加詞が現われている文と、追加付加詞がそのスコープとする *tersemyum manis* (微笑む) と同じ語が出てくる文 (ここでは一番最初の文) とは、共に同一人物についての記述なので、この場合、先程も述べたように、追加付加詞の *juga* を *pula* で置き換えることはできない。

- (85) *Ia tersenyum manis dan dengan lemah lembut katanya : ... Dengan kata-kata itu dan dengan tersenyum manis juga, ia berjalan kembali ke dapur. (Hati Nurani Manusia, p.13)*  
(女彼はにこにこし乍ら柔和な口調で…と言った, そう言い乍ら, そして, 前と同じ様に, にこにこし乍ら, 台所へと戻って行った。)

#### 注

1. 原文においては, *juga* が文尾に置かれている。
2. この場合の *pun* は, 「も又」, 「は又」の意で使われる *pun* ではなくて, 連続した物語の展開を表わす場合によく使用される *pun* で, 典型的には, *-lah* と共に用いられるものである。
3. 原文では, '*di ruang makan itu pula*' となっている。
4. 原文では, '*...membawa juga dampak sosial bagi keluarga*' となっている。
5. 例文 (33) に同じ。
6. 原文では, '*akan menjadi juga mulutku*' となっている。

#### 参考文献

1. Brita Fjelkestam-Nilsson (1983). *Also and Too*. Stockholm: Almqvist & Wikell International.
2. Sidney Greenbaum (1970). *Studies in English Adverbial Usage*. London: Longman Group Ltd..
3. 奥津敬一郎他著 (1986). 『いわゆる日本語助詞の研究』. 東京: 凡人社.

#### 引用作品

1. Aji Rosidi (1981). *Mengenal Jepang*. Jakarta: Pustaka Jaya.
2. Christie, Agatha (1984). *Misteri Karidia*. Jakarta: PT Gramedia.

3. Haggard, H. Rider (translated by Antonius Adiwiyoto) ( ? ). *Dia*. Jakarta : PT Gramedia.
4. Hugo, Victor (1980). *Si Bongkok dari Notre-Dame*. Jakarta : PT Gramedia.
5. Idrus (1976). *Hati Nurani Manusia*. Jakarta : Pustaka Jaya.
6. Mira W. (1981). *Ketika Cinta Harus Memilih*. Jakarta : PT Gramedia.
7. N. St. Iskandar (1981). *Abu Nawas*. Jakarta : PN Balai Pustaka.
8. Poe, Edgar Allan (translated by Gulia Sri Haryani) (1980). *Tenggelam dalam Pusaran Maelstrom*. Jakarta : PT Gramedia.
9. Sarumpaet, J. P., H. Hendrata (1977). *A Modern Reader in Bahasa Indonesia*. Singapore : Tien Wah Press Pte. Ltd..
10. W. J. S. Poerwadarminta (1983). *Kamus Umum Bahasa Indonesia*. Jakarta : PN Balai Pustaka.
11. Y. Wiramiharja, Djuhaeni (1974). *Sejarah Kebangsaan* Jilid 2. Bandung : PT Karya Nusantara.